# 文化箏入門

## 羽　衣

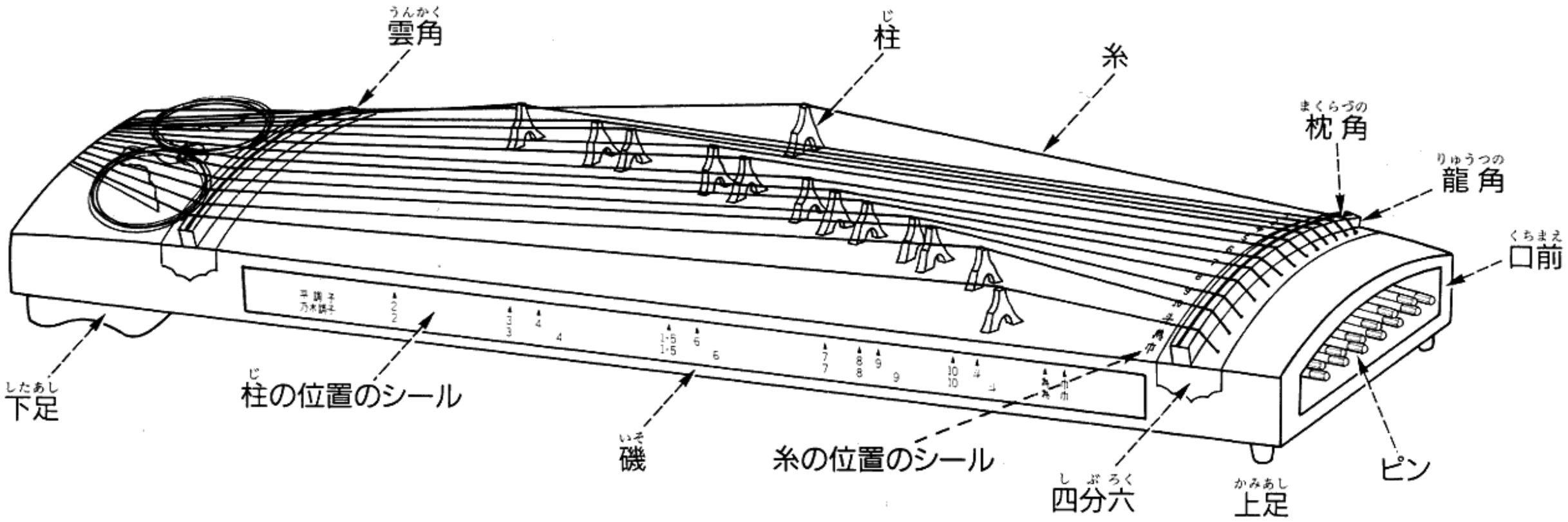
文化箏は本来のお箏を基本とした分数箏です。本物同様総桐製で、糸も本物と同じものを使用していますが、誰でも手軽にお箏の音色を楽しめるように形を小さく改良しました。そして簡便な替え糸や開放弦方式を取り入れることによって、糸締めや調弦のわずらわしさをかなり緩和することができました。また楽譜も五線譜や本来の難しい書き方を避け、数字譜を使うことによって最初から曲が弾けるように工夫されています。更に短くしたことによって押し手がずいぶん楽になり、内容が大きく広がりました。このお箏で練習することによって将来は本来のお箏にも進んでいけるようになっています。

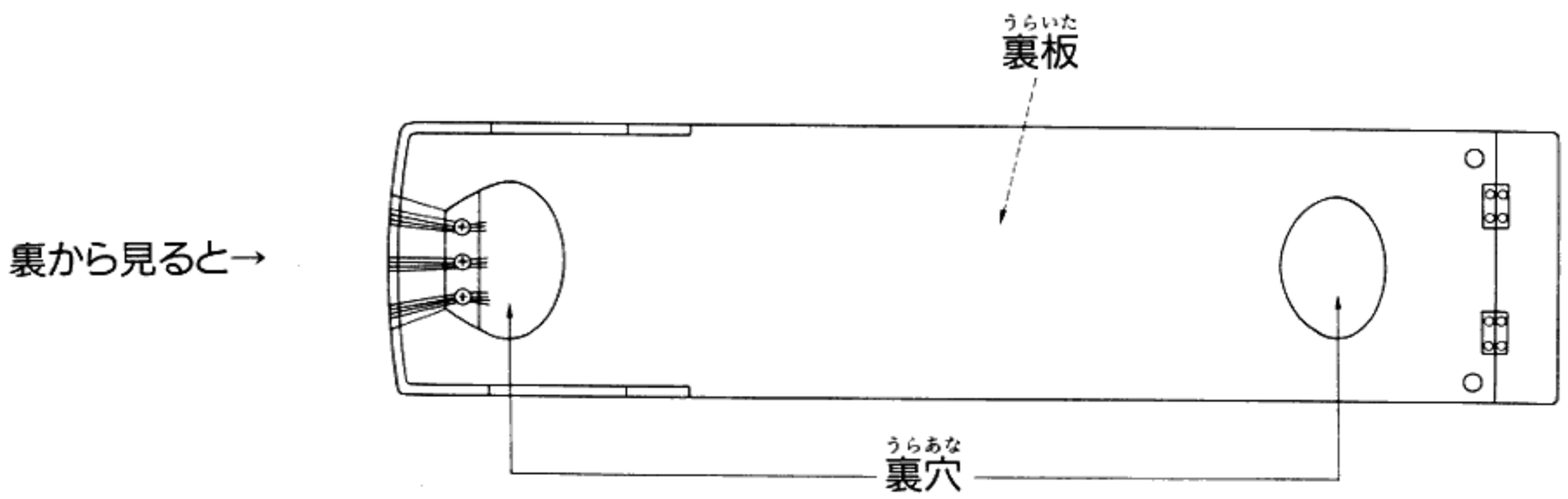
　ひとりで弾いてもグループで弾いても楽しい日本のお箏の音色を文化箏羽衣でどうぞお楽しみ下さい。

全音楽譜出版社

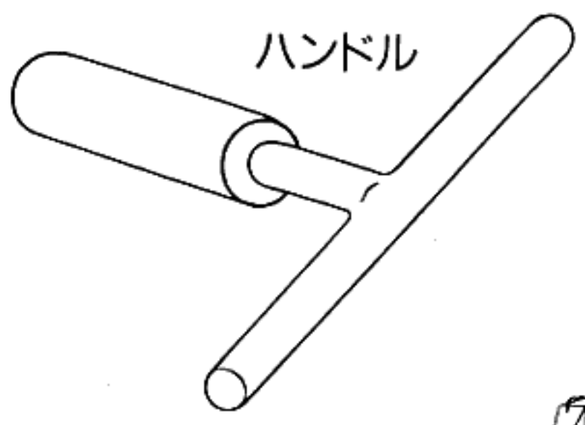
# Ⅰ　各部の名称

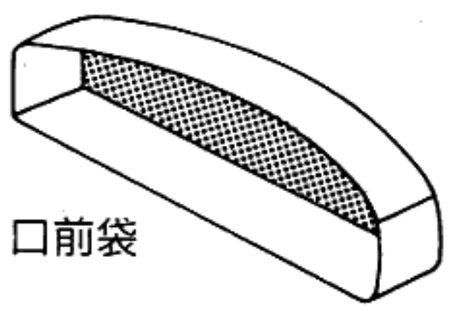
（セット内容）

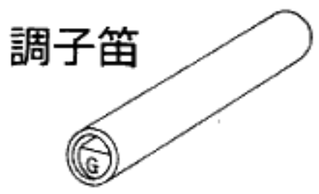


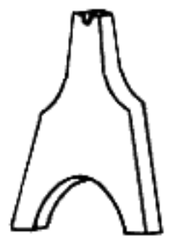



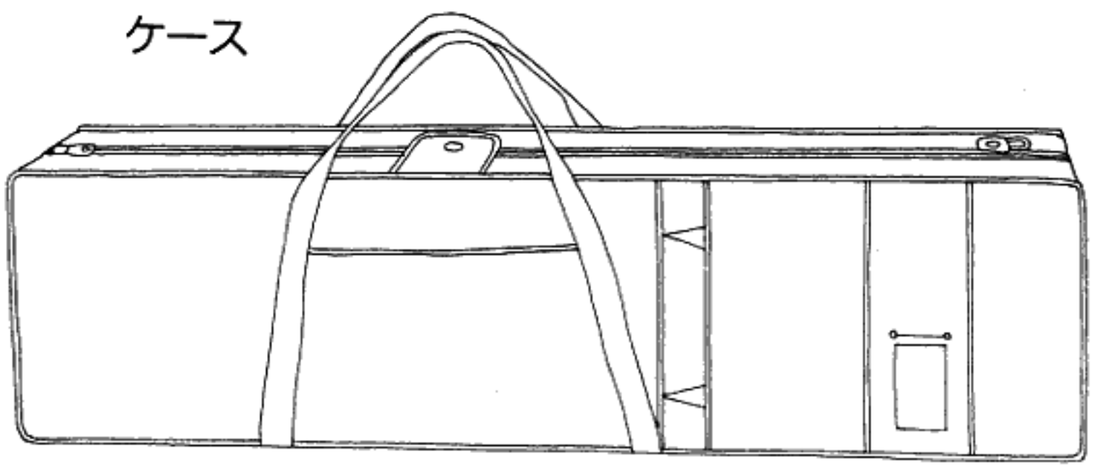

爪　3コ



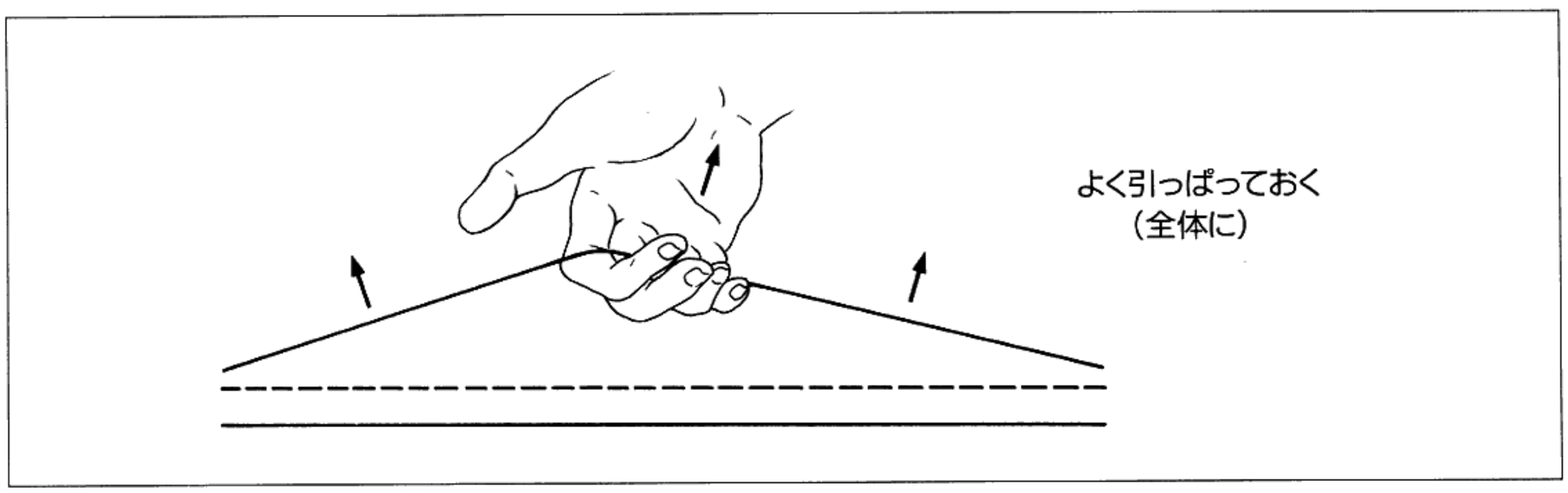





# II　調　弦

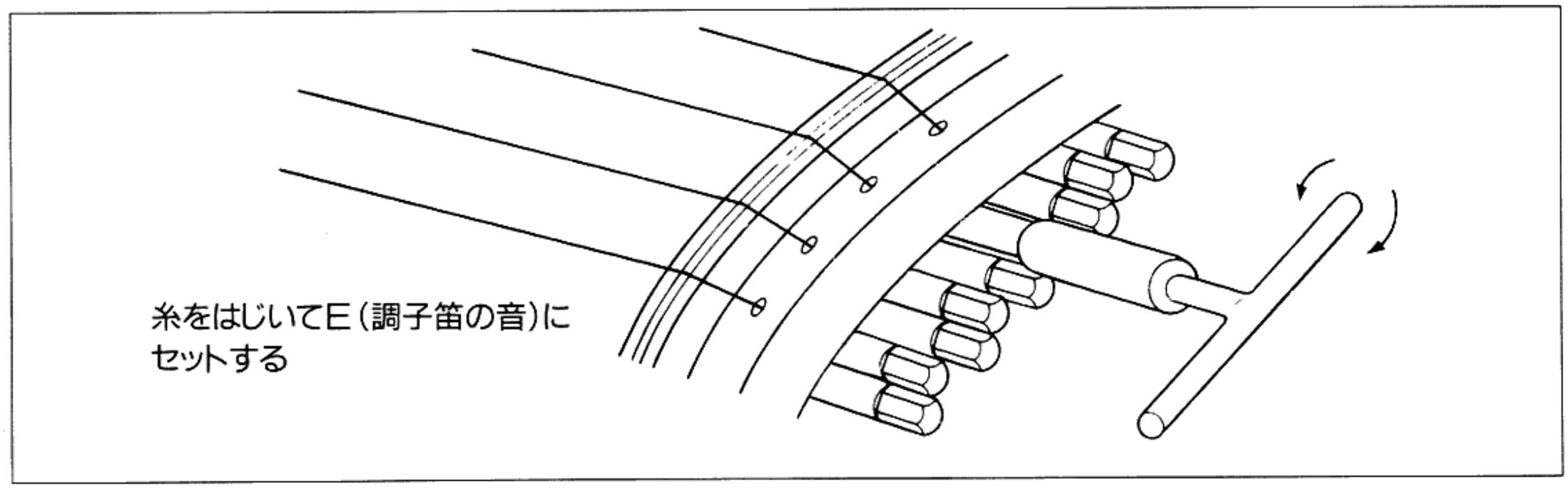
## ①　糸をよく伸ばす

まずお箏を目の前に置いてみましょう。ピンのほうが右です。お箏は桐の木でできています。(総桐)その上に13本の糸が張ってあります。昔は絹糸でしたが、今日ではほとんどテトロン製になりました。向うがわから1．2．3…10と呼び、11番めは斗(と)、12番めが為(い)、そして13番めを巾(きん)と呼びます。これに柱(じ)を立てると、じつに妙なる響きがするわけですが、その前にお箏の糸は大変伸びるのであらかじめよく引っぱっておきます。



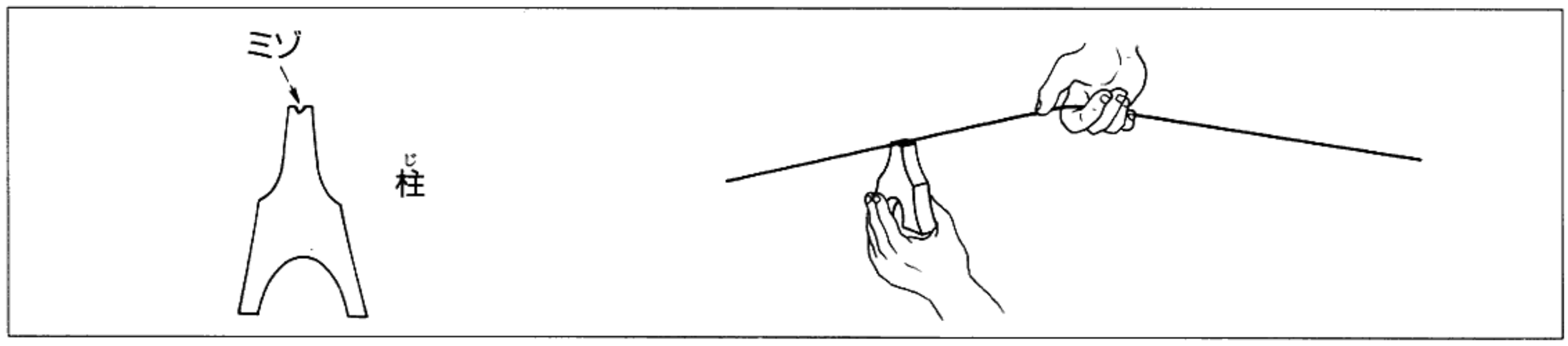

## ②開放弦をEの音に合わせる

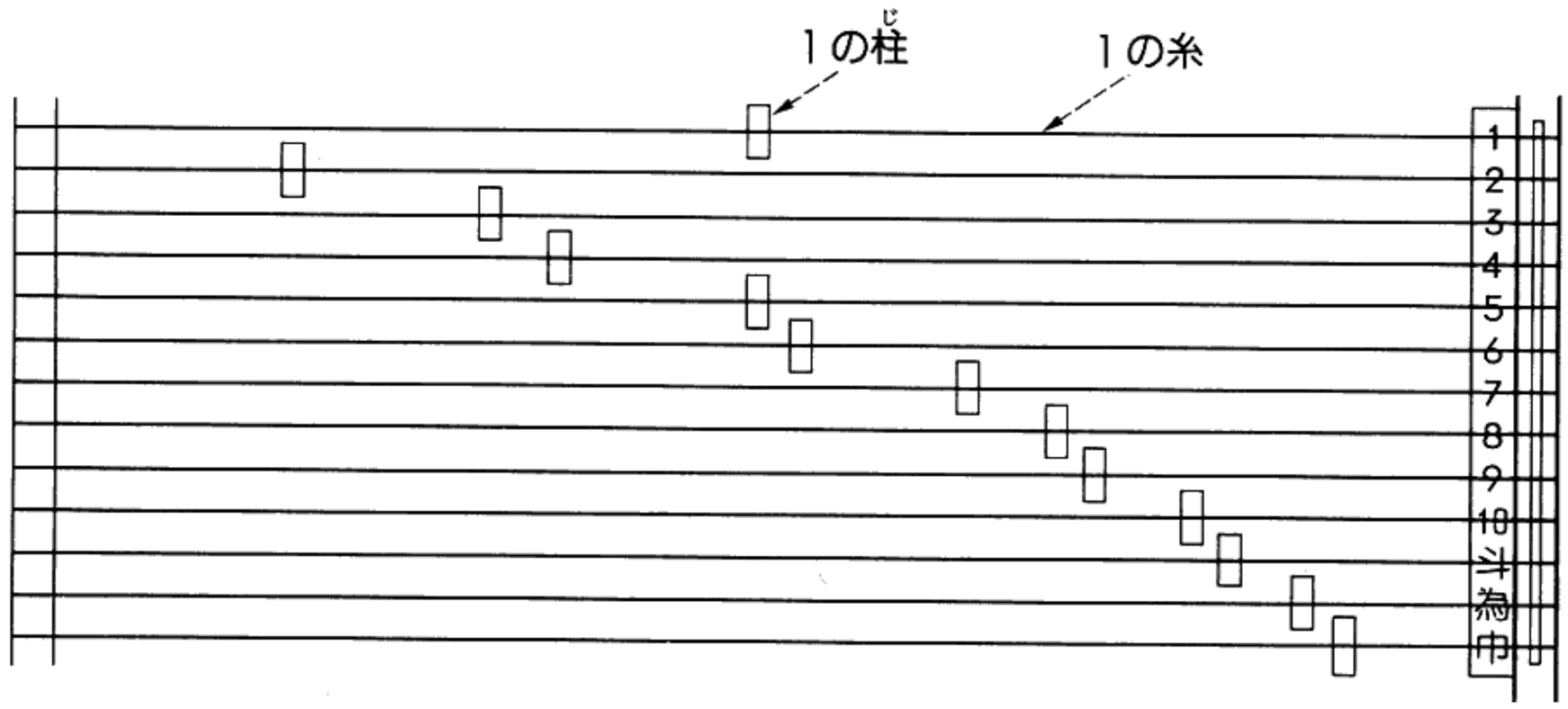
この文化箏羽衣は柱(じ)を立てなくてもはじくと音が出るようになっています。これを開放弦と言います。柱(じ)をきれいに並べるためにあらかじめこの開放弦をすべて同じ音に揃えておきます。付属の調子笛を使って13本すべての音をこの音E(ホ)に合わせて下さい。上げ下げはハンドルを使ってピンを回して行います。ちょっと回しただけでかなり音高が違ってきますから御注意下さい。



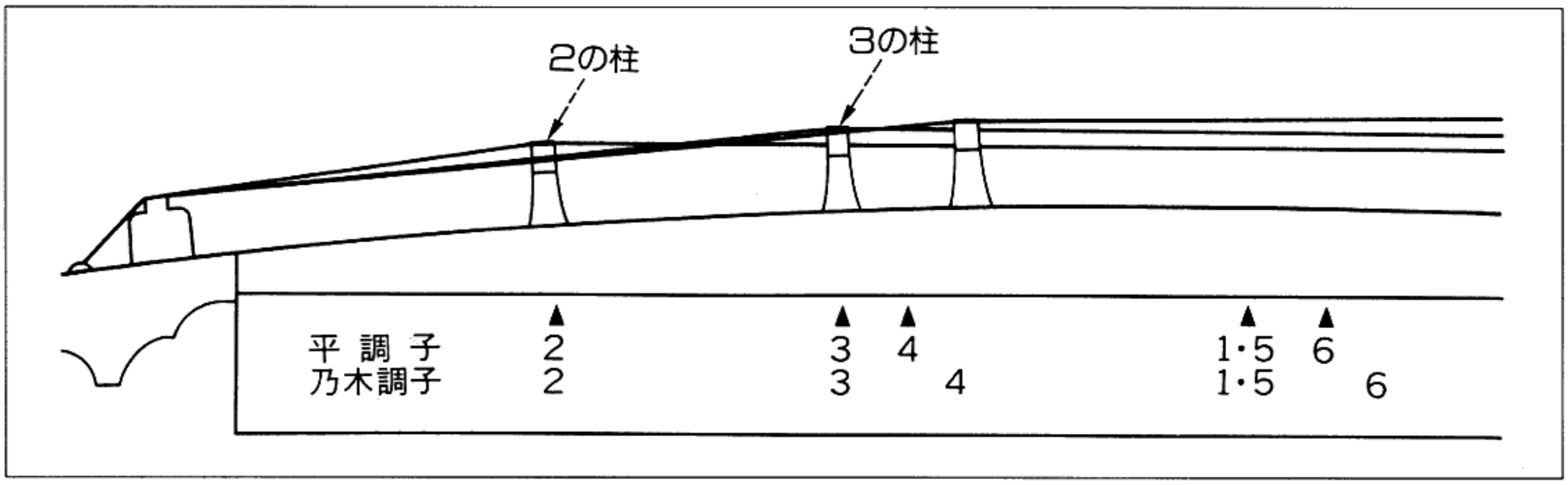
## ③柱を立てる

さて柱を立てます。お箏は柱を立てることによって本当の音が出ます。しかしどこに立ててもいいのではなく、きちんとした調子(音階)になるように正しい位置に立てなければなりません。これを調弦(ちょうげん)と言います。お箏の最も基本的な調弦は平調子(ひらじょうし)と呼ばれています。まず柱をだいたい下の図のように置きましょう。糸を持ち上げて柱のミゾにそっと置きます。



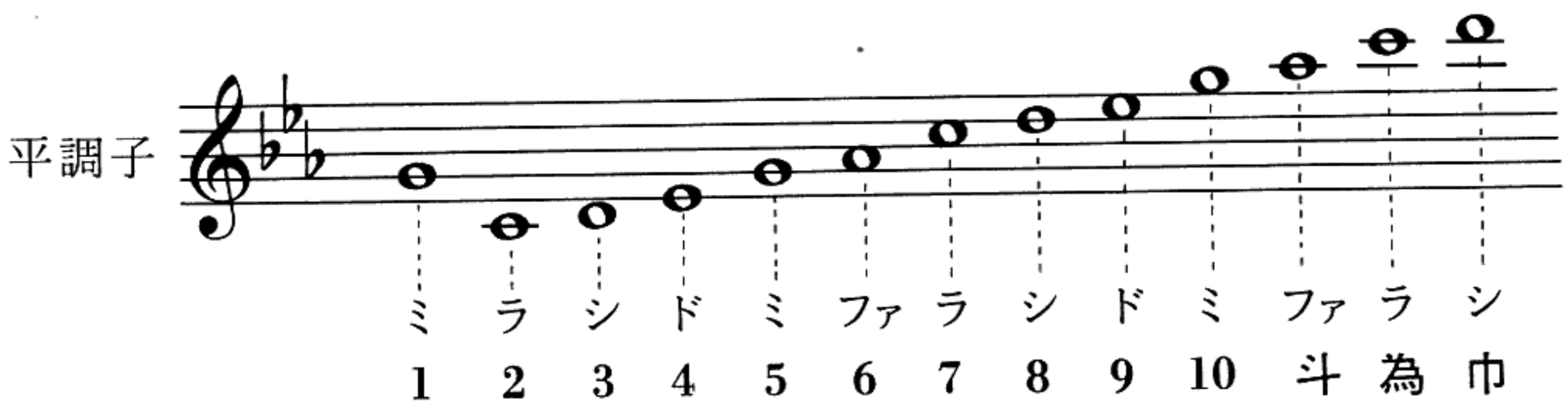




だいたい置きましたら磯(いそ：箏の手前の部分)に柱の位置のシールが張ってありますから真横から見て、その平調子の位置にひとつひとつセットします。1と5は同じ高さです。



## ④五線譜で書くと

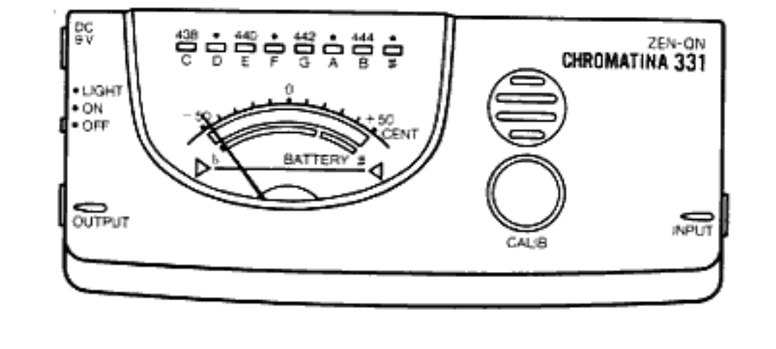
この文化箏ではこのように開放弦をEにセットし、シールの位置に柱(じ)を立てますと１の糸がおよそGの平調子になるようになっています。五線譜で書き表しますと下図のようになります。




これで平調子に調弦できたわけですが、ただ現実にはお箏の糸というのは絶えず伸び縮みしており、特に糸が新しい時は何日もかけて相当伸びるので、毎日のように糸を引っぱったり開放弦の音を合わせ直さなければなりません。また、このシールの位置に一度きちんと合わせても、じきに微妙な誤差が出てきてしまいます。この誤差は結局は自分の耳で判断して合わせなければならないもので、これは文化箏、本来のお箏を問わずお箏を学ぶ人にとって大きな課題となっています。こうした音感は特にこの文化箏のように、知っているメロディーを弾いていくうちに少しずつ養われていくものです。それがお箏のだいご味であり、楽しさにもつながるものですから、今すぐにできなくても少しずつつかみとっていただきたいと思います。

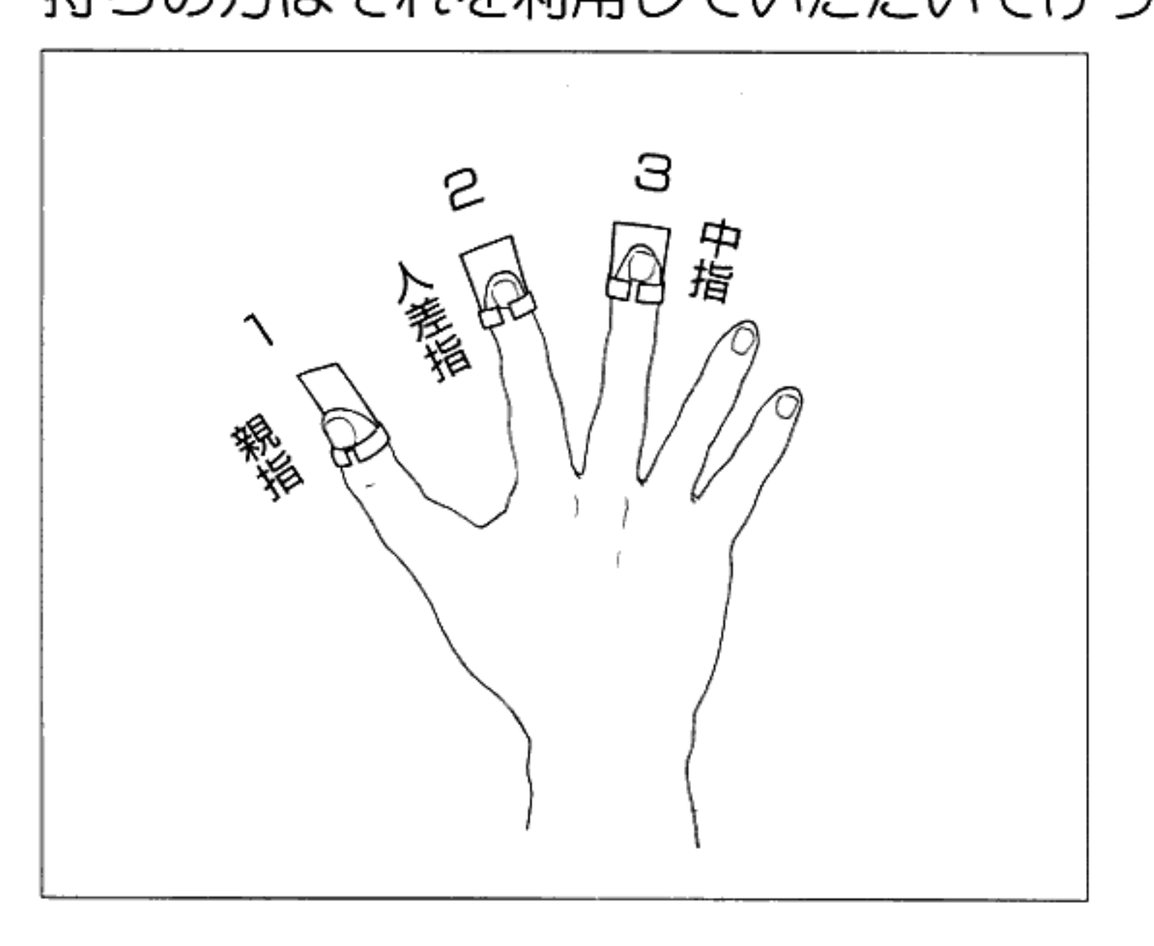
### ⑤調律器(チューナー)について

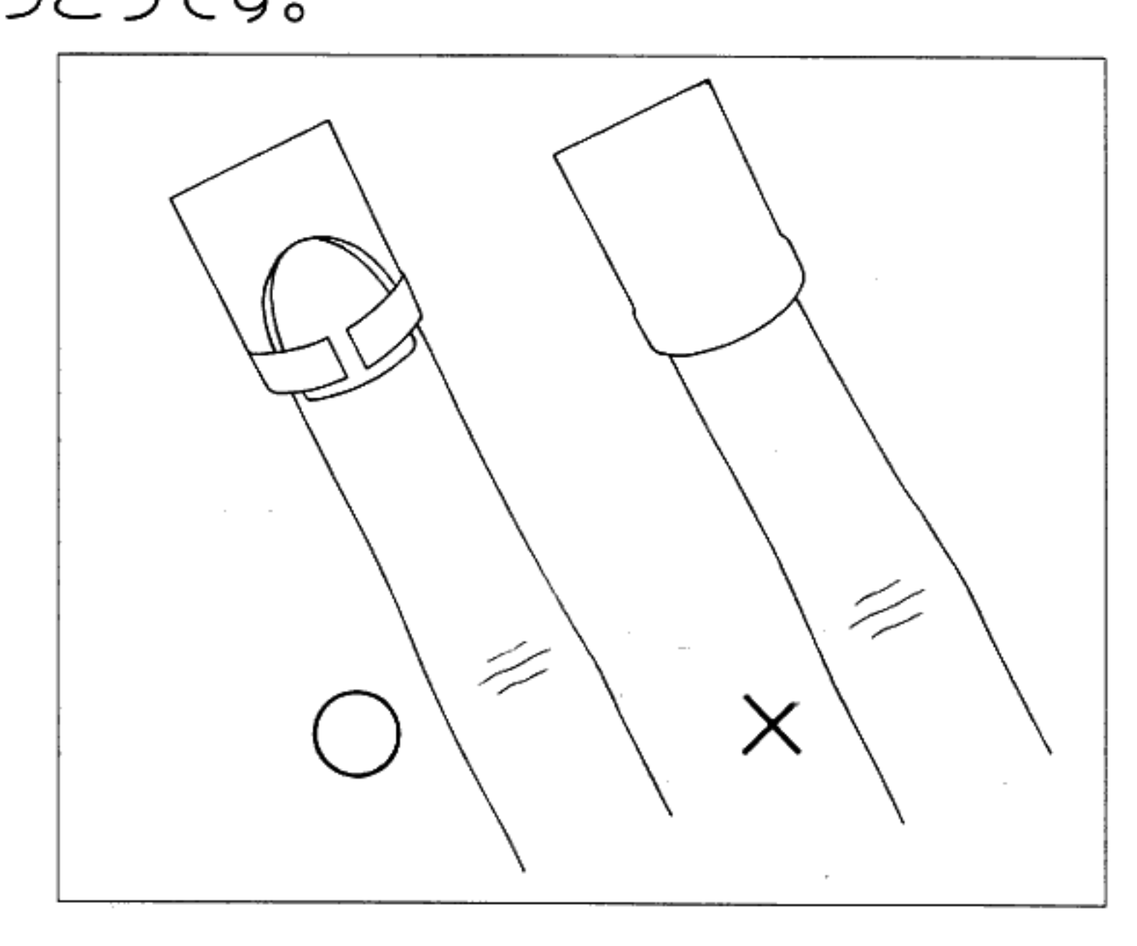
とは言っても最初はなかなかうまくいきません。そのために調律器(チューナー)というものがあります。これは電池で正しい音が出る機器で、今出ている音が高いか低いかという表示が出るようになっています。出来れば1台あれば大変便利ですので、クロマチック式を楽器店でお求め下さい。使い方は簡単です。使用書で十分理解できます。




# III　爪をはめます

お箏は爪をはめて弾きます。3ケの爪を親指(1の指)人差指(2の指)中指(3の指)にはめます。はめ方が逆にならないように御注意下さい。付属品として付いている爪は3ケとも同じものですが、フリーサイズですのでどの指にはめてもけっこうです。どうしても合わない時はセロテープ等で微調整して下さい。今までのお箏の爪をお持ちの方はそれを利用していただいてけっこうです。

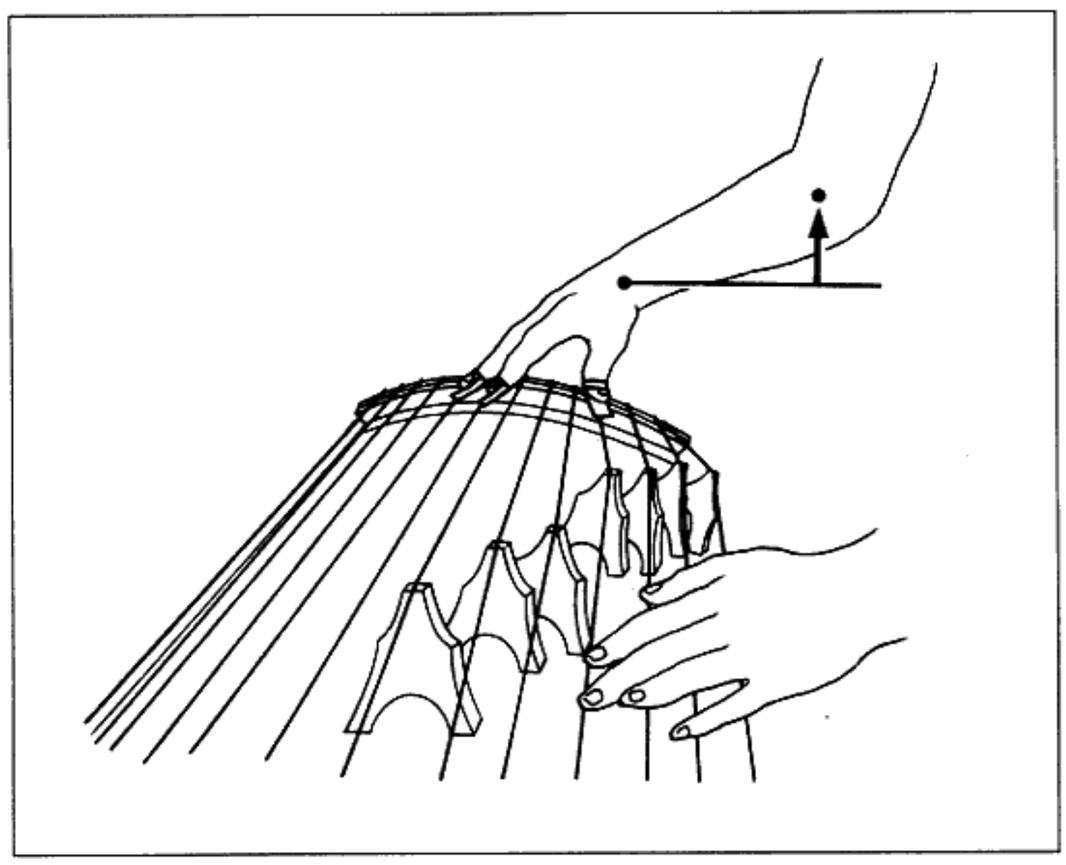


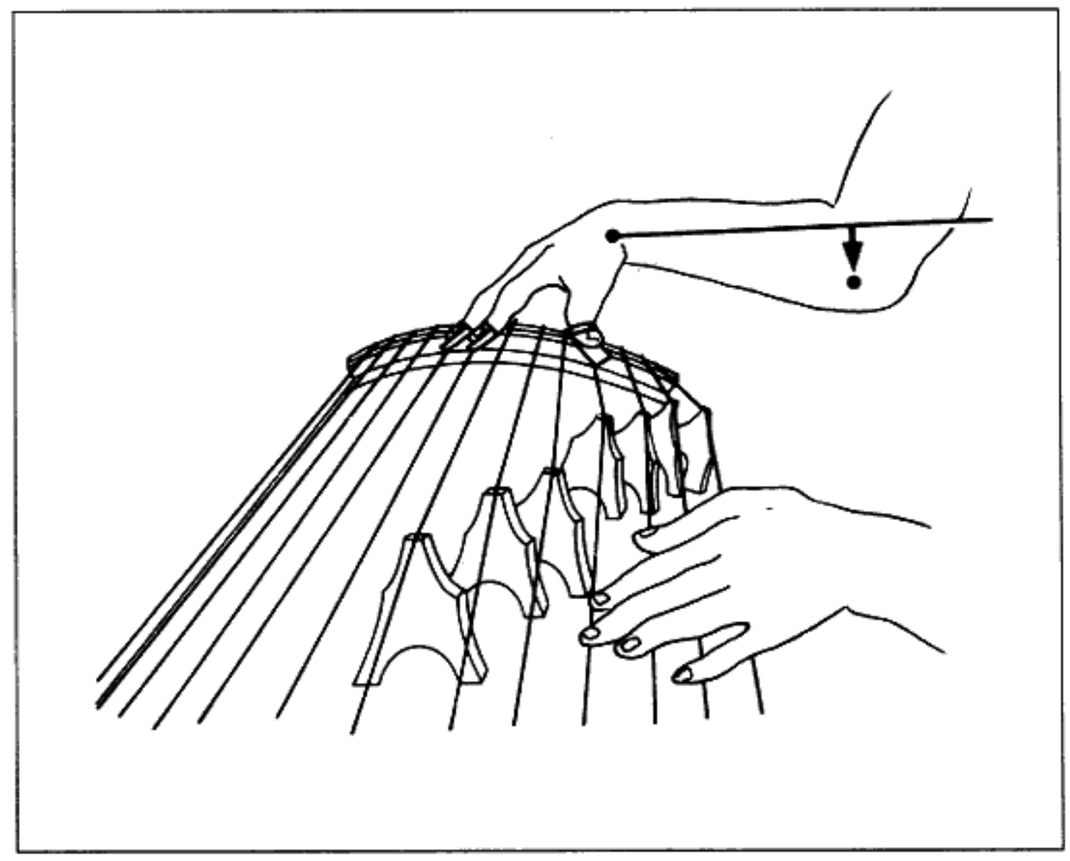
# Ⅳ　構え方・弾く位置

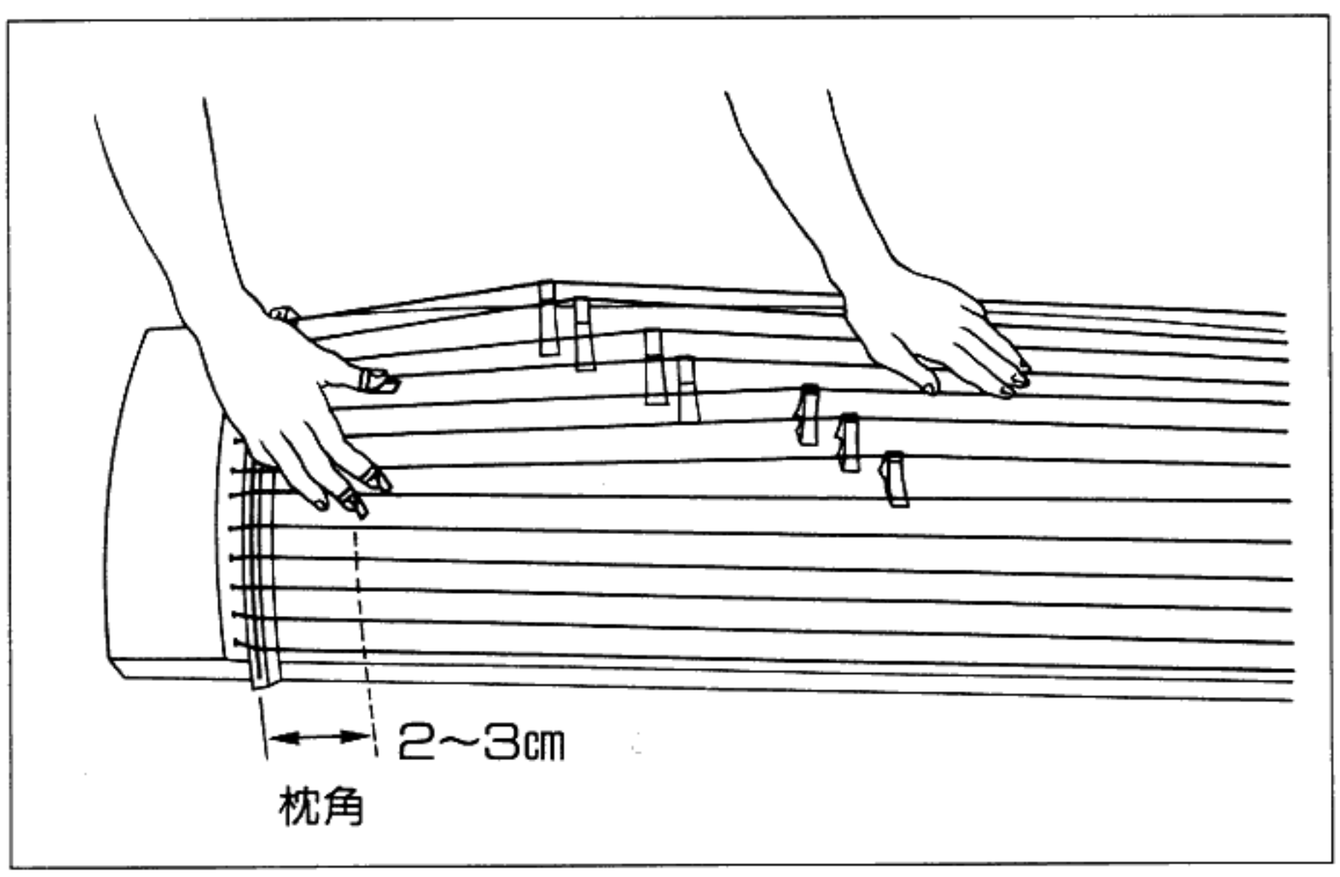
お箏をテーブルの上に置きます。普通の家庭のテーブルの上に置きますと少し高く感じるかもしれません。そういう時は椅子に座ぶとんを重ねる等工夫して下さい。手を自然にお箏の上に伸ばした時、ひじが手首より上になっている状態がいいでしょう。

○



×






爪を当てる位置は枕角（まくらづの）から2～3cmの所です。左手は柱（じ）の左側に軽く添えておきます。

# V　楽譜の見方

さて、いよいよ演奏にはいります。楽譜は糸の名称(数字)で横書きで表わしてあります。書いてある糸を手前から向うにむかって押すように弾きます。特に指づかいの印が無い時は親指で弾きます。

## 練習曲

→横に進んでいく

① | 1 2 3 4 | 5 6 7 8 | 9 10 斗 為 | 巾 ⊙ ⊙ ○ ‖

1拍 1拍 1拍 1拍

休符

② | 巾 為 斗 ○ | 10 9 8 ○ | 7 6 5 4 | 3 ⊙ ⊙ ○ ‖

1小節　　〃

休符も○が1拍ぶんですから、きちんと〝ウン〟と休みましょう。

③ | 10 10 10 ○ | 10 <u>10 10</u> 10 ○ | 10 10 10 ○ | 10 - <u>10</u> 10 ○ ‖

テン テ テ テン　　テエ ンテ テン

数字の下にアンダーライン＿＿があるのは八分音符を意味します。つまり1拍に音がふたつ入るのです。(テンテテテン)最後の小節は、ふたつの音のうち前のほうを弾かないことを表わします。(テエンテテン)

こうした練習は大切ですから何度もくり返して下さい。

# さくら

日本古謡

4/4

| 7 7 8 ○ | 7 7 8 ○ | 7 8 9 8 | 7 <u>87</u>6 ○ |

さくら　さくら　やよいの　そらーは

| 5 4 5 6 | 5 <u>54</u>3 ○ | 7 8 9 8 |

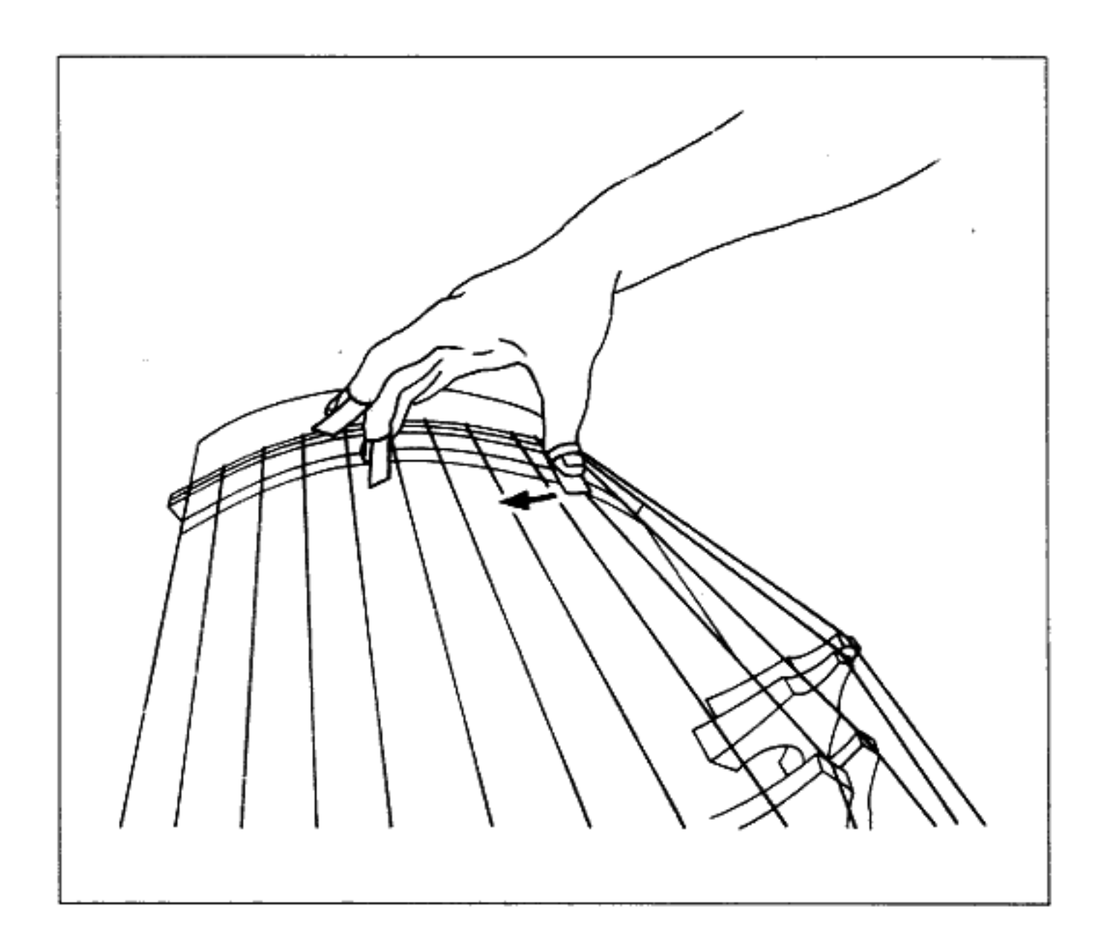
みわたす　かぎーり　かすみか

| 7 <u>87</u>6 ○ | 5 4 5 6 | 5 <u>54</u>3 ○ |

くもーか　においぞ　いずーる

| 7 7 8 ○ | 7 7 8 ○ | 5 6 <u>87</u>6 | 5 ⊙ 1/5 ○ ‖

いざや　いざや　みにゆーかん



向こうの糸に押しつけるように

有名な「さくら」を弾いてみましょう。親指の爪をしっかりと糸に当て、むこうに押しつける気持ちでひとつひとつ力強く弾きます。

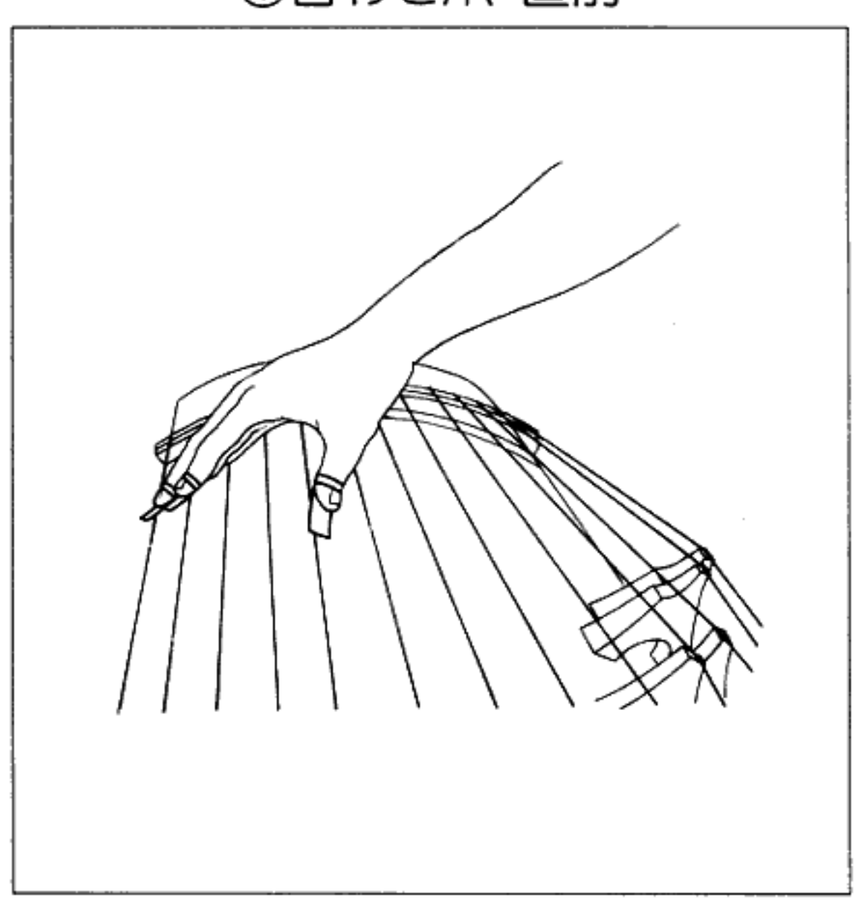
八分音符のかんじをつかんで下さい。

**7　8 7 6**　　**5　5 4 3**

テン　コ　ロ　リン　　テン　コ　ロ　リン

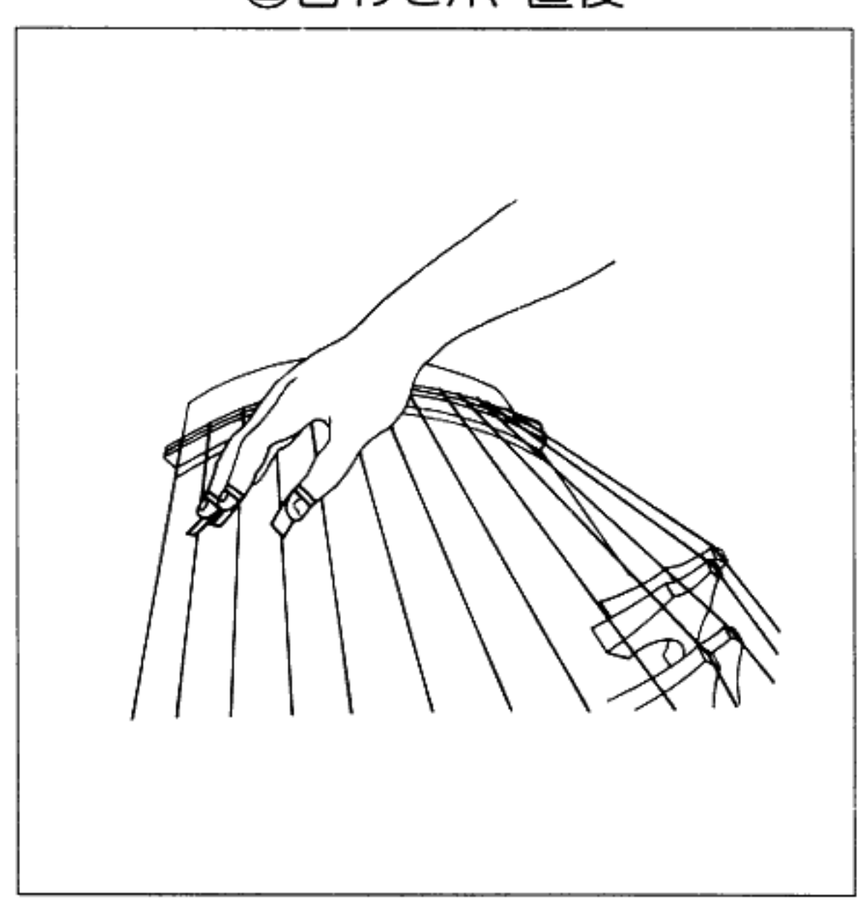
最後の$\frac{1}{5}$は合わせ爪と言って1と5の糸を中指と親指で同時に弾きます。

①合わせ爪-直前



1と5をはじいている

②合わせ爪-直後



2と4を押さえて鳴らないようにしている

# うさぎ

日本古謡

4/4

| 6 ⊙ 6 7 | 8 7 8 ○ | 6 6 6 7 |

う さ ぎ う さ ぎ な に み て

| 8 7 8 ○ | 7 8 9 9 | 8 7 7 6 5 |

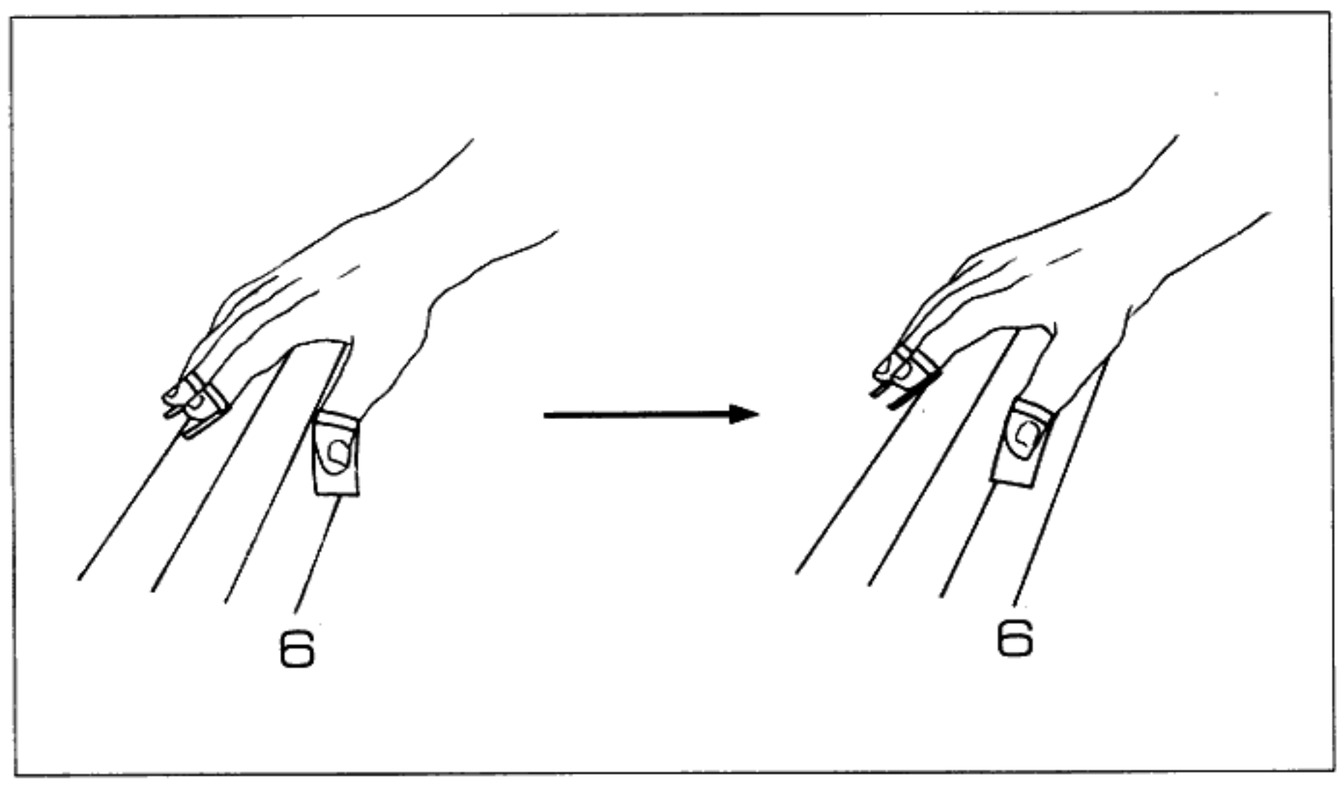
は ね る じゅ う ご や お つ き さ ま

| 7 6 5 ⊙ | 6 5 オ4 ⊙ | 5 ⊙ ⊙ ○ ‖

み て は ー ー ね る

※ 4/4 ……拍子記号。四分音符4つで1小節になっていることを表わします。1拍ずつ進んでいくという感じをつかんで下さい。

ある糸を弾いたあと、爪の腹が向こう側の糸にパタッとついていないといけません。例えば冒頭の6を弾いた直後、5の糸に爪がしっかりと止まっていなければならないのです。そういうふうにしっかりと弾いたほうがいい音がするからです。




6を弾いた直後
5本目を押さえている

○は休符です。１拍ぶんきちんと休みましょう。

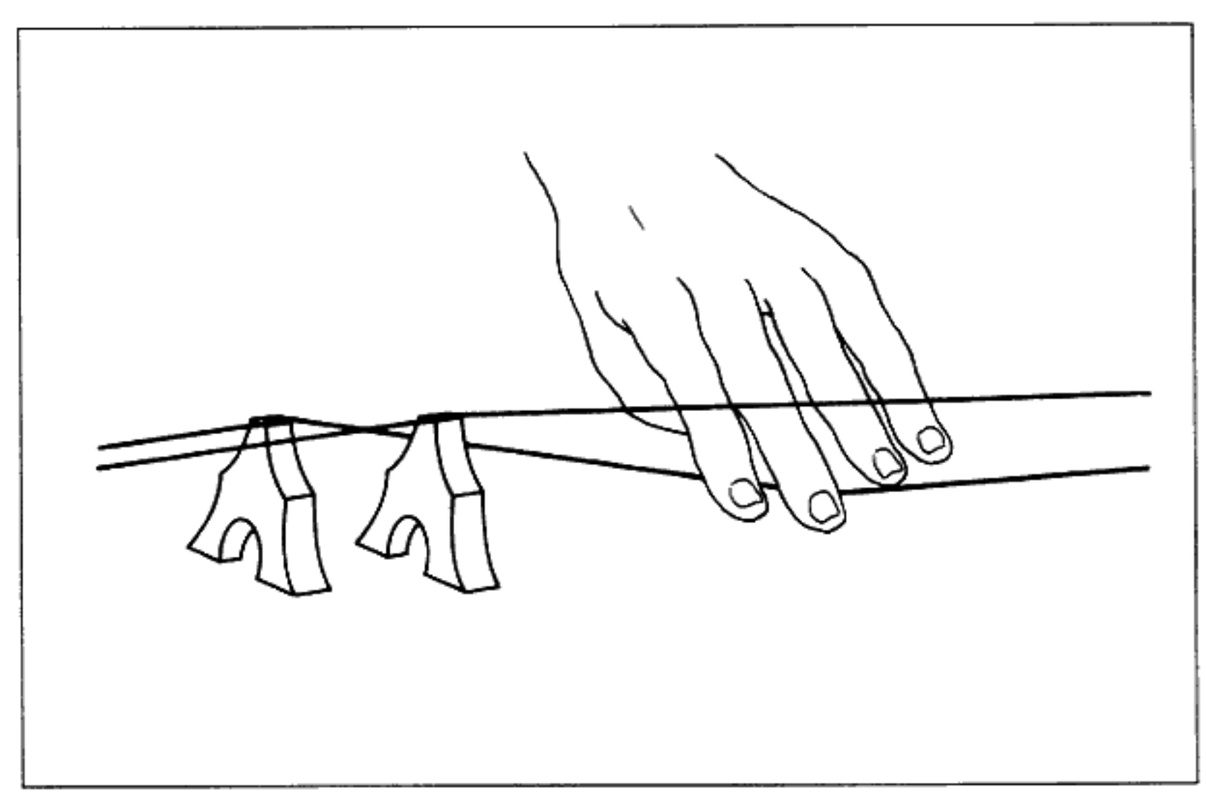
| 6 | ○ | 6 | 7 |
|---|---|---|---|
| タン | うん | タン | タン |

| 6 | ⊙ | 6 | 7 |
|---|---|---|---|
| 1拍 | 1拍 | 1拍 | 1拍 |
| 1ト | 2ト | 3ト | 4ト |

→

♯4は4の柱(じ)の左側の糸を左手で押すことによってもとの音よりも１音高い音を出します。柱(じ)の左側約10cm<らいの所を2と3の指で上からグッと押します。

次の5の糸を弾くと爪が4の糸にあたって♯4の余韻が消えます。それまで手を放してはいけません。



ひとさし指と中指で押している

# む　す　び

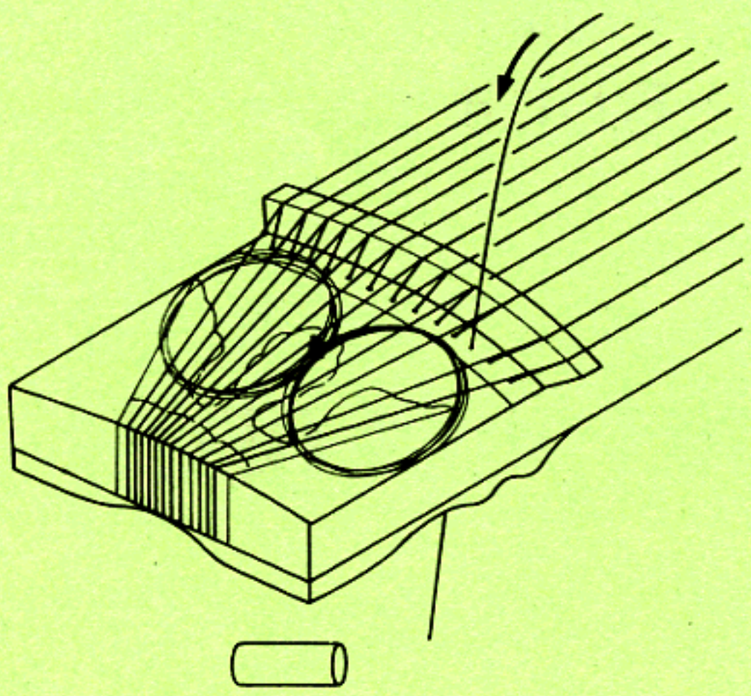
## 本物の爪について

　この文化箏ではプラスティック製の爪を使っていますが、本来のお箏の爪（象牙製）で弾くこともできます。どうしても象牙のほうがしっかりしているので音はいいようです。この爪でものたりなくなったらどうぞ手にとってみて下さい。

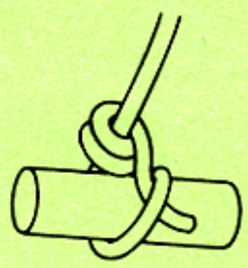
## 糸が切れた時

　長い間練習していると糸が切れる時があります。これは弾いている部分がすり減って切れるので仕方がありません。その場合は替え糸（別売）を取りつけます。まず切れた糸を取り除いて下さい。その後図のようにタマを結び、ハンドルで巻き上げます。うんと伸びますからよく引っぱっておいて下さい。替え糸が出来るのは文化箏の特長であり、本来の箏の場合は専門家に頼まないと糸の張り替えは出来ないのです。

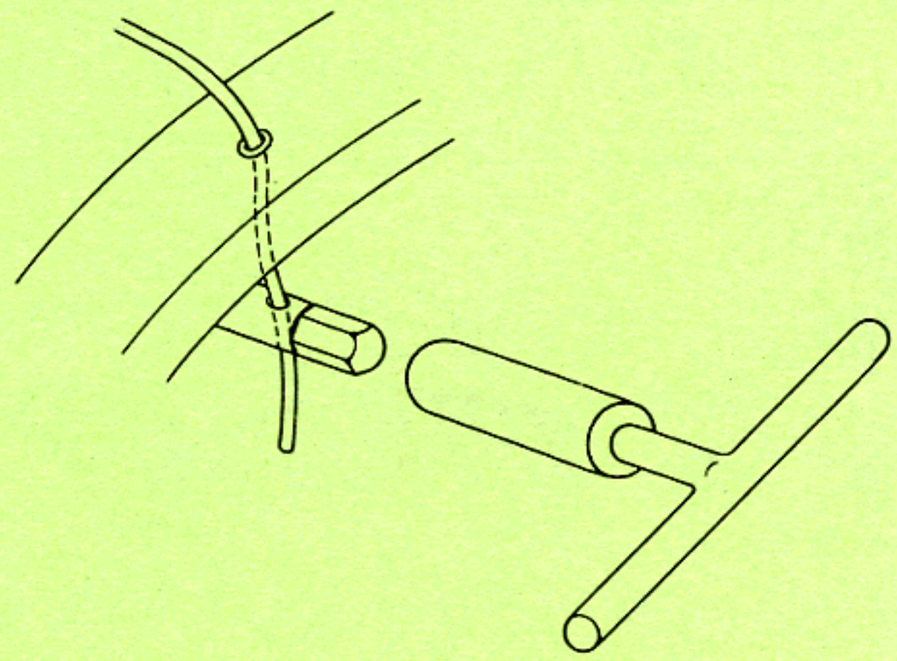
①糸を上から通す




②タマを結ぶ
（2度通し結び）



③もう片方をハンドルで巻く



　このあとはひきつづき「文化箏のための小曲集シリーズ」（全音楽譜出版社編）でお楽しみ下さい。

文化箏　製造元　㈱大瀧邦楽器
　　発売元　㈱全音楽譜出版社
文化箏についてのお問合わせ先
　　〒162 東京都新宿区東五軒町3-14
　　㈱ゼンオン営業企画開発室　TEL 03-3267-4311
（文化箏教室の開設及び指導講師の募集を全国的に行っています）

日本音楽著作権協会（出）許諾 第9405956-401号